

- ◇大会への参加をより自由に
- ◇石本基金出版助成金(第2回)公募について
- ◇学会報告
- ◇会務報告
- ◇会計報告
- ◇寄贈図書紹介
- ◇学会・研究会予告
- ◇編集委員会からのお知らせ
- ◇事務局からのお知らせ
- ◇編集後記

## 大会への参加をより自由に——今年度からの新しい試み

日本科学哲学会 会長  
丹治信春

本学会の大会は年を追うごとに盛んとなり、会員の皆様からもご好評の声をいただいているように思います。そうした中、いっそう内容の充実をはかり、また自由に参加していただくために、理事会でいくつか新しい提案が採択されました。

まず、会員の方々がお子さん連れで気兼ねなく大会に参加できるように、以下の3点を決定しました。

- (1) 発表会場にお子さんを自由に同伴していただいてよい。
- (2) 大会会場に、お子さん連れの会員のための控え室を確保する(但し、お子さんの安全については、各会員で責任をもって監督していただく)。
- (3) 今後利用状況を見守りながら、託児施設利用のための会員補助を検討する。

どうか会員の皆様のご理解とご協力をいただきますようお願い致します。

さらに、従来ワークショップの提題者として非会員の方をお招きする際に、交通費が支給されませんでした。今年度の大会からひとまず総額で上限5万円の交通費補助を行います。これによって従来以上に意欲的なワークショップを企画していただけるようになると思います。

またわれわれの大会だけでなく、他の学会との協力、特に国際会議への援助をすすめていくことも確認されました。詳しくは石本基金ニュースレターでご報告します。

## 石本基金出版助成(第2回)公募について

石本基金出版助成第2回公募受付を、6月20日より開始します(締切:7月20日)。

本助成の趣旨、応募条件、提出書類等の詳細についてはホームページおよび6月発行の「石本基金ニュースレター No.3」をご参照下さい。なお、正式な公募要項及び応募書式は5月末までにホームページ上で公開します。

## 名古屋哲学フォーラムについて

服部裕幸（南山大学）

日本科学哲学学会会員の皆様、今日は名古屋哲学フォーラムをご紹介します。これまでニュースレターでいくつかの学会や研究会が紹介されてきましたが、このフォーラムはそうした学会や研究会とはすこし違っています。というのは、このフォーラムには決まった会員とか構成員といった人はいないからです。そうなりますと、当然のことながら、規約もありませんし、会費もありません。興味のある方は誰でも参加できます。したがって、初めの頃は懇親会の残金を通信費にあてたり、あるいは参加者から100円前後の参加費をいただいたこともあったかもしれません。（残念ながら、古いことなので、記憶に残っていません。どなたかご記憶の方はお知らせ下さい。）

第1回名古屋哲学フォーラムは、1985年6月24日に名古屋大学を会場にして開催されました。当時若くて意気盛んであった横山輝雄氏（南山大学）や柴田正良氏（当時は名古屋大学院生、現在は金沢大学）や私（横山氏や柴田氏はまだ20代で、私も30そこそこでした）が中心となって、若手同士でホットな話題についてとことん議論しようじゃないか、ということで開催を決めました。私たちは勉強会などしたあと、よく近所の飲み屋で哲学の議論を深夜遅くまでやっていたのですが、その「のり」で哲学の議論を昼間やろうというわけでした。というのは、学会や普通の研究会などだと、発表時間も短いし、いわゆる「大御所」などがいると、遠慮せずに若手が存分に質問したり、それに応えたりすることができないことが多いからです。（おそらくこの事情は今もそれほど変わらないのではないのでしょうか。）第1回のフォーラムではピーター・ウィンチの異文化理解に関する見解とそれに関連するテーマが取りあげられたと記憶しています。発表者は柴田氏、加藤泰史氏、松本洋之氏、私でした。野家啓一氏や若手とは言えない吉田

夏彦氏も出席して議論に参加されていたと記憶しています。現在、フォーラムは秋（通常は9月の第2週あたりの土曜日）に行うことが通例となっていますが、このとき6月に行ったのは、その直前に科学基礎論学会が名古屋で開催されたので、関心を持ってくれる人がきっと1日余計に名古屋に泊まって参加してくれるのではないか、と思ったからです。

先に述べましたように、名古屋哲学フォーラムは学会や普通の研究会ではないので、毎年開催するということは当初は考えていませんでしたが、柴田氏の「継続は力なり」という発言を大事にして、その後もずっと続けてきて、今日に至っています。その間、開催できなかった年もありましたが、逆に、秋以外にも開催して年2回行った年もありました。名称も必ずしも毎年同じであったわけではなく、2回目は「哲学ワークショップ」という名で開催し、しばらくはこの名称が使われました。しかし、現在は「名古屋哲学フォーラム」という名称が定着したようなので、この名称を使っています。会場は2回目以降は基本的には南山大学ですが、2005年には京都の京大会館で開催したこともあります。このときには京都の若手の方もたくさん参加してくださいました。ちなみに、そのときのテーマは「マクダウェルの哲学」でした。

フォーラムのテーマは、「ミーハー」と言われようと、そのときにもっとも流行っているやつにしよう、ということで選んでいます。もちろん私たちがそのときに興味を持っているものを、というのが基本ですが、戸田山和久氏が名古屋に来てからは、彼にも世話人になってもらっています。テーマの選択のみならず、案内文の作成に当たっては彼に負うところが多いです。好みはありまじょうが、彼の気の利いた案内文を楽しみにしている人も多いのではないのでしょうか。

名古屋哲学フォーラムの世話人は、発足当時は横山氏、柴田氏、私、でしたが、その後戸田山氏が加わりました。金子善彦氏(現在首都大学)が南山大学にいたときには彼も世話人の一人でした。発足時には意気盛んな若手であった私たちも、相変わらず意気盛んとはいえ、今ではとても若手とは言い難く、「ミーハー」路線の継続や最先端の話題を把握しているかという点に不安がないでもありません。もう若手にバトンを渡すべき時が来ていると思っていますところ。

私たち世話人はこのフォーラムの公式記録をこれまで残しておらず、資料も組織的に保存していませんので、古い時期になりますと、どういうテーマでいつ誰が発表したかが不明な年も少なくありません。当時の資料が残っているもの以外は、私の手帳に残されたメモと記憶が唯一のたよりです。確かなデータをお持ちの方は是非お知らせ下さい。いずれにせよ、これまでに取りあげたテーマでわかっているものは、AIと哲学(1988、9)、ダメットの哲学(1991、9)、

物理学の哲学(1993、9)、全体論(1994、9)、非古典的論理(1995、9)、虚構的対象の意味論(1997、9)、相対主義(1997、3)、自己犠牲(1998、4)、心的内容(1999、9)、説明とは何か(2000、9)、日本語の意味論(2001、3)、動機論(2001、7)、心の科学と哲学(2001、9)、原因と理由(2002、6)、フォークサイコロジー(2002、9)、表象的志向性批判(2002、9) 真理論(2003、9)、時間論(2004、1) ベイズ主義(2004、9)、マクダウェルの哲学(2005、9)、メタ倫理学の現在(2006、9)、生物学の哲学(2007、9)、などです(テーマの正式名称ではなく、こういった内容であったという意味です)。9月以外に開催したフォーラムはたいいてい、どなたかが出版された本の合評会であったと思います。2001年以後のデータは名古屋大学の戸田山研究室のホームページで見ることができます。(この文章を書くに当たって、伊勢田哲治、柏端達也、柴田正良、野家啓一、松本洋之の各氏に情報提供していただきました。この場を借りてお礼申し上げます。)

## 社会科学の哲学の現状

吉田 敬

東京大学グローバル COE 「共生のための国際哲学教育研究センター」(UTCP)

ニューズレターの編集を担当されている伊勢田さんからお誘い頂きましたので、私の専門としている「社会科学の哲学(Philosophy of the Social Sciences)」について、現状報告をさせて頂きたいと思います。

社会科学の哲学という分野は残念ながら、あまり認知されていないように思われます。社会哲学、あるいは科学社会学といった隣接分野と混同され、説明に苦勞するというのはよくあることです。もちろん、社会科学の哲学はこうした分野と密接に関係していますが、全く同じというわけでもありません。ここでは社会科学の哲学とはどのようなものなのか、何を研究対象としているのか、英語圏での研究動向を踏まえて、紹介したいと思います。

社会科学の哲学とは、科学哲学の一分野であり、社会科学の目的と方法をその研究対象とし

ます。その際、社会科学とみなされうるのは、主に社会学、人類学、政治学、心理学、経済学であり、境界線上に属するのは、歴史学、地理学、言語学などが挙げられます。社会科学の哲学において、伝統的に問われてきた問いには、次のようなものがあります。社会現象は自然現象とは異なるのか。もし異なるのだとしたら、社会現象を研究する社会科学の目的と方法は、自然現象を対象とする自然科学の目的や方法とは異なるのかどうか。社会科学の目的と方法が自然科学のそれと異なるのなら、社会科学独自の目的と方法はいかなるものなのか。社会科学において、科学者自身の価値観はどのように働いているのか。それを排除すべきなのか。それを社会研究に含めるべきなのか(価値自由の問題)。社会を研究するに当たって、社会科学者は個人を単位として研究を進めるべきなのか、それと

も社会全体に焦点を当てるべきなのか。社会は個人の総和なのか、それ以上の存在なのか（方法論的個人主義と全体論の問題）、等々。こうした問題が社会科学の哲学の中核をなしてきた問題ですが、最近では、ジョン・サールやマーガレット・ギルバートなどを中心として、社会的実在に関する問題や、あるいは、マリオ・ブンゲやダニエル・スティールらによって、社会的メカニズムに関する問題も活発に議論されています。また、特に経済学の哲学という形で顕著ですが、個別社会科学の事例に則した研究も多々見られるようになってきました。

こうした問題を議論する場所を提供してきた学術誌の一つが、*Philosophy of the Social Sciences*（以下、『社会科学の哲学』）です。『社会科学の哲学』は1971年、カナダ・ヨーク大学の哲学科に在籍する、ポパー哲学に好意的な科学哲学者を中心として、創刊されました。初期の編集陣の顔触れは、イアン・ジャーヴィー（編集長）、ジョン・O・ウィズダム、ジョン・オニール、ハロルド・カプラン（後、ジャグディッシュ・ハティアンガディ）で、ウィズダム没後は、ジャーヴィー、オニール、ハティアンガディの三人が編集に携わっています。

編集陣全てについて紹介するわけには行きませんが、創刊以来の編集長であり、筆者の師でもある、イアン・ジャーヴィーについては少し触れておきたいと思います。ジャーヴィーはLSEのポパーとジョン・ワトキンスの下で博士号を取り、社会科学、特に、人類学と社会学の哲学を専門としています。社会科学の哲学において、ジャーヴィーの名を高めたのは、異文化の合理性に関する、ピーター・ウィンチとの論争であると思われます。また、もう一人のポパーの弟子でもある、ジョセフ・アガシとは協力関係にあり、共著論文をいくつか著しています。

さて、『社会科学の哲学』が創刊されるきっかけとなったのは、以前 *British Journal for the Philosophy of Science* の編集長を務めていたウィズダムの提唱によるものです。それに賛同したヨーク大学の哲学科、及び他学科の教員の協力の元に創刊されましたが、編集者のうち、ジャーヴィー、ウィズダム、ハティアンガディの三人はポパーの強い影響下にあり、現在でも『社会科学の哲学』はポパー哲学に好意的な数少ない

学術誌の一つとなっており、ポパー哲学関連の研究が掲載されることもよくあります。また、『社会科学の哲学』は創刊時から、国際誌であることを標榜しており、世界各国の研究者からの投稿があります。1990年からは社会科学を専門とする出版社、セイジから出版されるようになり、それに合わせて、編集同人の顔触れもヨーク大学に所属する、あるいは関係を持つ研究者から社会科学の哲学に関心を持つ、国際的に著名な研究者（例えば、ヤン・エルスター、マーシャル・サーリンズ、チャールズ・テイラーなど）に変更になりました。このことによって、ヨーク大学の紀要の延長であったものから本当の意味での国際学術誌に変貌したと言えるでしょう。今年2008年には、創刊38年を迎え、社会科学の哲学の研究者にとって、分野を代表する学術誌と言って差し支えないだろうと思います。

また、『社会科学の哲学』はアメリカ・ミズーリ州セント・ルイス周辺の社会科学の哲学者たちによって、始められた *Philosophy of Social Science Roundtable*（「社会科学の哲学円卓会議」、<http://philosophy.ucsc.edu/Roundtable.html>）と提携し、毎年3月に特集号を出版しています。この学会は前述の通り、セント・ルイス周辺の社会科学の哲学を専門とする研究者たちアリソン・ワイリー、ポール・A・ロス、ジェイムズ・ボーマンによって、「セント・ルイス社会科学の哲学円卓会議」として、セント・ルイスで開催されてきましたが、運営に携わるワイリーとロスがそれぞれ、ワシントン大学（シアトル）とカリフォルニア大学サンタ・クルーズ校に転出したため、セント・ルイス以外でも開催されており、2008年に10年目を迎えました。

ところで、数はまだまだ少ないものの、近年、社会科学の哲学に関する教科書や研究書が出版されるようになってきました。そうした中から、社会科学の哲学について学んでみたいと思われる方には、まず、ブライアン・フェイの *Contemporary Philosophy of Social Science* (Blackwell, 1996) をお勧めしたいと思います。本書は従来の実証主義的な社会科学の哲学とは異なる、多文化的アプローチを標榜しており、文化間、あるいは社会間差異の問題をその中心に据えているという点で、注目に値します。また、実証主義的なきらいはありますが、マー

ティンとマッキンタイア編集による *Readings in the Philosophy of Social Science* (MIT Press, 1994) が代表的なアンソロジーです。更に、フェイトとアプローチは異なりますが、マリオ・ブンゲの *Finding Philosophy in Social Science* (Yale University Press, 1996) や *Social Science under Debate* (University of Toronto Press, 1998) は著者の該博な知識を生かした、大学院生向けの教科書です。その他にも、スティーヴン・ターナーとロス編集の *The Blackwell Guide to the Philosophy of the Social Sciences* (Blackwell, 2003) や、Elsevier から出版が進んでいる科学哲学ハンドブックシリーズから、ターナーとマーク・ライスジョード編集による *Philosophy of Anthropology and Sociology* (Elsevier, 2007) とポール・サガード編集の *Philosophy of Psychology and Cognitive*

*Science* (Elsevier, 2007) が出版されており、ウスカリ・マキ編集の *Philosophy of Economics* も近刊予定です。

以上、簡単ではありますが、社会科学の哲学の現状を紹介してきましたが、社会科学の哲学は我が国のみならず、英語圏においても注目されている分野ではありません。この原因には、英語圏の科学哲学が主として、自然科学、とりわけ、物理学と生物学にのみ焦点を当てていることがあるように思います。その意味では、社会科学の哲学はまだまだ発展途上であり、より一層の研究の進展が期待される分野です。このささやかな紹介をきっかけに、社会科学の哲学に関心を寄せて下さる方がいらっしゃれば、幸いです。



## 会務報告

(2007.4.1~2008.3.31)

### 日本科学哲学会第 12 期理事会

#### 第 3 回

日時：2007 年 6 月 30 日 (土) 13:30~14:30

- 議題：1. 新入会員、退会会員について  
2. 石本基金 出版助成公募概要について  
3. 石本基金 アンソロジーについて

#### 第 4 回

日時：2007 年 9 月 8 日 (土) 13:30~14:30

- 議題：1. 新入会員、退会会員について  
2. 2006 年度収支決算案について  
3. 石本基金 出版助成審査手順について  
4. 石本基金 アンソロジーについて  
5. 石本賞について

#### 第 5 回 (40 回大会実行委員会合同会議)

日時：2007 年 11 月 10 日 (土) 12:45~14:00

- 議題：1. 新入会員・退会会員について  
2. 2006 年度収支決算について  
3. 2007 年度収支予算について

4. 来年度大会について  
5. 石本基金について

#### 第 6 回

日時：2007 年 12 月 22 日 (土) 14:30~15:30

- 議題：1. 退会会員について  
2. 国際学会への協賛、援助について  
3. 石本基金 アンソロジーについて  
4. 事務局の移転について  
5. 若手研究助成について  
6. 石本基金次期運営委員について

#### 第 7 回

日時：2008 年 3 月 29 日 (土) 13:30~15:00

- 議題：1. 新入会会員、退会会員について  
2. 事務局移転について  
3. 石本基金について  
4. 韓国科学哲学会との交流について  
5. 大会開催時の託児所設置、ワークショップについて  
6. 名簿更新について

『科学哲学』第40巻編集委員会

第3回

- 日時：2007年6月30日(土) 14:45~15:45  
 議題：1. 応募論文審査状況について  
 2. 『科学哲学』第40巻1号の準備状況について  
 3. 書評について  
 4. 応募論文の審査および応募形式の変更について

第4回

- 日時：2007年11月11日(日) 12:45~13:45  
 議題：1. 応募論文審査状況について  
 2. 『科学哲学』第40巻2号の準備状況について  
 3. 書評について

第5回(第12期理事会合同会議)

- 日時：2007年11月11日(日) 12:45~13:45  
 議題：1. 「科学哲学」第40巻2号の進行状況について  
 2. 書評について  
 3. 大会参加について

第6回

- 日時：2007年12月22日(土) 15:45~16:45  
 議題：1. 応募論文審査状況について  
 2. 『科学哲学』第40巻2号の準備状況について  
 3. 『科学哲学』第41巻2号の特集テーマについて  
 4. 依頼論文について

第40回大会実行委員会

第2回

- 日時：2007年6月30日(土) 16:00~17:00  
 議題：1. 大会準備状況について  
 2. ワークショップ提題者の経費について  
 3. 大会プログラムについて

第3回

- 日時：2007年9月8日(土) 16:00~17:00  
 議題：1. 大会準備状況について  
 2. 司会者について  
 3. その他詳細について

『科学哲学』第41巻編集委員会

第1回

- 日時：2008年3月29日(土) 15:10~16:15  
 議題：1. 応募論文審査状況について  
 2. 書評について  
 3. 若手研究助成報告書について

第41回大会実行委員会

第1回

- 日時：2008年3月29日(土) 16:25~17:30  
 議題：1. 会場(福岡大学)について  
 2. 特別講演について  
 3. プログラムについて  
 4. 託児所について



会計報告

【2006年度決算】

<b>*収入</b>	20,692,440	<b>*支出</b>	20,692,440
(1) 本会計収入		(1) 本会計支出	
2005年度本会計繰越金	2,396,760	『科学哲学』39-1	437,570
学会費納入	2,787,000	『科学哲学』39-2	442,250
大会参加費	119,000	ニューズレター制作費	112,500
大会寄付	0	会員名簿制作費	284,750
学会誌売上	91,384	第39回大会運営費	677,806

預金利息	806	通信費	403,415
出版社著作権協議会分配金	23,000	印刷費	60,235
石本基金より事務補助	800,000	消耗品費	124,410
小計 (1)	6,217,950	委員会交通費	204,000
		事務局費	89,533
		講師料	30,000
		事務局補助給与	1,126,200
		アルバイト代・手数料	109,655
		支出合計 (1)	4,102,324
		本会計繰越金	2,115,626
		小計 (1)	6,217,950

(2) 石本基金収入

前年度繰越金	9,470,000
故石本氏ご遺族寄付金	
2007年	5,000,000
預金利息	4,490
小計 (2)	14,474,490
収入 (1) + (2)	20,692,440

(2) 石本基金支出

石本賞副賞	100,340
賞状代	10,867
交通費	90,580
事務補助費 (本会計へ支出)	800,000
贈与税 (2006年分)	530,000
支出合計 (2)	1,531,787
石本基金繰越金	12,942,703
小計 (2)	14,474,490
支出 (1) + (2)	20,692,440

\* 懇親会基金

収入		支出	
前年度繰越	141,766	オードブル 70人前	
懇親会費 (88名×5000円)	440,000	(単価 5000円)	350,000
利息	92	来年度繰越	231,858
収入計	581,858	支出計	581,858

\* 定期預金 (スーパー定期 2年 自動継続 満期 2007年 4月 25日)

繰越	395,569
利息	166
合計 (来年度繰越)	395,735

【2007年度予算】

* 収入	23,589,429	* 支出	23,589,429
(1) 本会計収入		(1) 本会計支出	
2006年度本会計繰越金	2,115,626	『科学哲学』 40-1	450,000
学会費納入	2,400,000	『科学哲学』 40-2	450,000
大会参加費	200,000	ニューズレター制作費	120,000

大会寄付	0
学会誌売上	100,000
預金利息	100
出版社著作権協議会分配金	27,000
石本基金より事務補助	800,000
小計 (1)	5,642,726

第 40 回大会運営費	400,000
通信費	400,000
印刷費	100,000
消耗品費	100,000
委員会交通費	150,000
事務局費	100,000
講師料	0
事務局補助給与	1,100,000
アルバイト代・手数料	200,000
支出合計 (1)	3,570,000
本会計次年度繰越金	2,072,726
小計 (1)	5,642,726

## (2) 石本基金収入

前年度繰越金	12,942,703
故石本氏ご遺族寄付金	
2008 年	5,000,000
預金利息	4,000
小計 (2)	17,946,703
収入 (1) + (2)	23,589,429

## (2) 石本基金支出

石本賞副賞	100,000
賞状代	10,000
若手研究助成金	1,050,000
雑費 (手数料等)	10,000
出版企画費用	1,300,000
事務補助費 (本会計へ支出)	800,000
贈与税 (2007 年分)	530,000
支出合計 (2)	3,800,000
石本基金次年度繰越金	14,146,703
小計 (2)	17,946,703
支出 (1) + (2)	23,589,429



## 寄贈図書紹介

大学教育学会『大学教育学会誌』29 巻 1 号  
 中央大学文学部『紀要 哲学』第 50 号

清水義夫『圏論による論理学 高階論理とトポス』東京大学出版会

三浦俊彦『多宇宙と輪廻転生 人間原理のパラドクス』青土社

田中一之 (編)『ゲーデルと 20 世紀の論理学 4 集合論とプラトニズム』東京大学出版会

長滝祥司・柴田正良・美濃正 (編)『感情とクオリアの謎』昭和堂

京都大学総合博物館・京都大学生態学研究センター編

『生物の多様性ってなんだろう? 生命のジグソーパズル』京都大学学術出版会

西田利貞『人間性はどこから来たか サル学からのアプローチ』京都大学学術出版会





## 学会・研究会予告

### 日本科学哲学会第 41 回大会

【期日】2008 年 10 月 18 日 (土)・19 日 (日)

【場所】福岡大学・七隈キャンパス

### 第 10 回アジア論理学会議

【期日】2008 年 9 月 1 日～9 月 6 日

【場所】神戸大学

### 科学基礎論学会 2008 年度総会

【期日】2008 年 6 月 21 日 (土)・22 日 (日)

【場所】東京電機大学



## 編集委員会からのお知らせ

編集委員長 野矢茂樹

### (1) 『科学哲学』第 41 巻 2 号の特集テーマについて

第 41 巻 2 号の特集テーマは「非合理性とは何か」です。このテーマでの応募論文を引き続き募集しています(締め切り:7 月 11 日)どうぞ奮ってご応募ください。

なお、締め切りを過ぎた場合でも自由応募論文としてこのテーマに関連する論文をご投稿いただくことは可能ですが、当該の号に掲載可能な期日内で審査を終えることができない場合がありますのでご承知おきください。

### (2) 自由応募論文について

自由応募論文は随時受け付けています。応募に際しては、『科学哲学』最新号(40-2 号)巻末掲載の論文応募要領(昨年度改訂)を参照の上、注意事項を守るようお願いいたします。



## 事務局からのお知らせ

### (1) 学会費納入について

2008 年度分の学会費をお納めくださいますようお願い申し上げます。貴台の(今年度分を含めた)学会費未納分合計金額に相当する数字が、封筒表面のラベル右下に記載されていますので、同封の振込用紙にてお納め下さい。なお 0 以下の表記の方は完納となっております。

### (2) 登録情報の変更について

ご登録いただいている住所、メールアドレス、所属等のご変更があった場合はお早めに事務局までお届けください。また送付先住所を所属機関へ指定されている場合は、所属機関を異動した際に送付先変更のお申し出がないと、郵送物が宛先不明で届かなくなりますのでご注意ください。



## 編集後記

ニューズレターの編集長という仕事を引き受けてから二回目の編集号ということになる。実は編集長を引き受けるまで、編集長がついて読み物を掲載するニューズレターは年一回の発行だということに気づいていなかった。漫然と読んでいるとそんなことにも気づかないものである。

さて今回は南山の服部さんと現在東大にいる吉田さんをお願いして原稿を書いていただいた。名古屋哲学フォーラムのウェブサイトは私が（実は服部さんの了解を得ずに）運営していたので縁は浅くないのだが、自分が関わる前は どうだったのだろう、という、いわば自分の好奇心で紹介文をお願いしたものである。吉田さんはジャーヴィーの下で学んだ社会科学の哲学のエキスパートで、以前から何か仕事をお願いしようと思っていたのだが、この機会に実現することになった。私事になるが、この4月から職場が変わって、生活環境やら仕事の環境が大幅に変化した。前任地で培った人脈は大切にしつつ、新規の人脈も開発して、このニューズレターを「年に一度おもしろいのが来るぞ」と期待されるようなものにしていきたいと考えている。持ち込みも歓迎するので、よい素材をお持ちの方はご一報をお願いしたい。

(伊勢田哲治)

〒 192-0397 首都大学東京大学院 人文科学研究科 哲学教室内  
日本科学哲学会事務局

fax. 042-677-2073 (「日本科学哲学会」宛であることを明記して下さい。)

e-mail. [philsci@comp.metro-u.ac.jp](mailto:philsci@comp.metro-u.ac.jp)

URL. <http://wwwsoc.nii.ac.jp/pssj/index.html>